

ウ イ ー ン

で の 留 学 研 究 を 終

え て

北 村 武

一、ウィーン到着まで

昭和五十三年四月十三日、外地での生活に多少の不安を抱きながら、羽田空港を後に、一路ウィーンへと向った。午後十時三十分発フランクフルト行に搭乗。二十分遅れで午後十時五十分日本を飛び立つ。高度一万メートル、速度九百五十キロメートル、東京湾の夜景、恐らく釣舟であろうその燈が点々と美しい。機内は思ったより搭乗者も少なく、ゆつたりとした気分。機内放送から流れるクラシック音楽をレシーバーで聞き、少々落着いた気分に入る。中継地アンカレッジまで約六時間十五分、やがてハム・スパゲティー・コーヒーの機内食が運ばれる。食事後、暫らく眠りにつく。アンカレッジ午前十時五分（日本時間十四日午前五時）着。給油の後、まだ滑走路のわきに残雪のあるアンカレッジ空港をあとに、再び、コペンハーゲンに向け飛び立つ。離陸後十分程たっただろうか、下界を眺

めれば、広々とした森林の景色から、やがて、真白き雪をいただいた山々、恐らくアラスカ山脈であろう、その雄大な自然と静けさを目のあたりに見る。

四月十四日午前六時五十分（日本時間午後二時五十分）コペンハーゲンに到着整備のいきとどいたかなり大きな空港である。次のウィーン行SAS機出発まで約三時間三十分ロビーで待つ。アメリカのティーンエージャーの旅行の団が、私の周囲に腰をかけ、何やら騒々しく話を始める。やがて、フライトの時間がきたらしく、横のゲートから消えていく。私が腰をかけている前のカメラ・フィルムの売店では、二十才前後の金髪の美しいお嬢さんが、コカコーラを口にしながら、お客の相手をしている。日本では、客を相手にしながら飲食することは、不謹慎極まる行為かも知れない。一人の中年の客が、ポラロイドカメラを買って立ち去った。この空港では、廊下やロビーにテレビが設置され、各航空機の出発時と、ゲートを知らせようになっている。

ロビーで待つこと三時間、私が塔乗する航空機の知らせが、いっこうに出る気配がない。少々不安になり、廊下ですれちがったパイロットに聞く。「テレビに必ず出るからそれまで待て」と言うことだ。

出発十分前にやっと表示される。その間何と不安を抱いたことか。羽田を出発し約二十三時間後（十四日午後十二時三十五分）無事ウィーンのシュベヒャーター空港に到着する。このシュベヒャーター空港は、ウィーンより南東の郊外にあり小じんまりとした空港であるが、ヨーロッパでも美しい空港のひとつと言われている。空港から市内まで三十分毎にバスが走っている。

到着時、何の知識ももたなかった私は、先ず家主に電話をするが、生憎外出中で通話できず。タクシーに乗り下宿先まで行くことにする。窓から見る郊外のたたずまいは誠に美しい。古い農家の家々、美しく耕された畑、やがてドナウ運河の岸辺に出て、ウィーンの都へ向つて走る。途中、桜並木に出て（まだつばみであつ

たが）ウィーンにも桜の名所があったかと驚く。始めて見るウィーンを物めずらしげに眺めること約四十分、私の下宿先ヤーンガッセに到着する。タクシーの運転手に、チップとして三十五シリング（日本円約五百円）渡す。チップの相場は約一割と聞いていたが、少々払い過ぎたようだ。私の一年間の計画、「ドイツリー

ドの唱法と音楽的解釈及び表現法の研究 二、ヨーロッパの音楽教育（初等・幼児）の実情視察及びその発展と普及に関する研究 三、宗教音楽の現在における実態についておもいめぐらし、ウィーンの初夜を過す。

二、音楽の都ウィーン

過去何世紀にもわたって、ヨーロッパの文化の中心地として栄えたウィーンはゴシック作りの尖塔をもつ大寺院、バロックスタイルの宮殿、壮嚴とした感じどこいかにもどっしりとしたオペラハウス、そして旧市街地には、昔と変わらない石

畳の道路が縦横し、その歴史を物語る建物がいいたるところにある。街の主要な公園には、モーツァルト、ブラームス、シュトラウスなどの像が立ち並び、古きよき時代をしのばせる。

春、五月頃から、木々の葉はその緑を一層あざやかにし、公園や宮殿内の庭園の花壇には、チューリップやパンジーなどの花が咲き匂い、小鳥が自然の中で自由に飛びかうさまを見る時、何か気持ちのなかに安らぎを感じる。ハインエ作詩、シューマン作曲 *Dichter Liebe* 「詩人の恋」の第一番 *Im Wunder schönen Monat Mai* 「美しい五月」には、次のような詩が書かれている。いと美しき五月には、蒼、すべてほころびぬ。我が心の内にも愛は花開きぬ。いと美しき五月には、鳥、すべて歌いぬ、我が思慕と渴望を、我、かの人にうちあけぬ。公園を散歩して、周囲の自然の美しさ、動物の活発な動きを見るにつけ、シューマンの春、五月を描いた絶妙な旋律とハインエの詩は、寒い雪の冬から開放された



チューリップの花が美しい市立公園

陽春の気分のなかから生みだされたことが理解できる。ウィーンの五月の明るい春の訪れは、日本とは違った強い印象をあたえるのである。

ウィーン市内の中心街には、Stadt

Park (市立公園)・Burg garden (王宮公園)・Volks Park (市民公園)・Rathaus Park (市庁舎公園)とカールス教会前には、Karl's Platz (カールス広場)がある。公園は、緑の芝生のなかに散策道路が通り、市民の憩いの場所となっている。ベンチには、日光浴を楽しみながら新聞、読書にふける老人、編物に我を忘れ、機械的に手を動かす老婆の姿をよく見かけた。

マロニエやリラの木々などの緑が美しく、そのきわには、シューベルトやシュトラウスの像が立ち、音楽の都の象徴を感じざるをえない。公園の中にはカフェもあり、散策に疲れた時など、ウィーンのコーヒーを味わうのもまた格別の味がする。コーヒーで思い出したが、私は、日本から出る際、ウィーン滞在中ウィーン

ナーコーヒーを充分味わうよう人からのすすめもあり、時たま公園を散策した折、早速カフェに入り「ウィーンナーコーヒー」を注文したところ、ボーイから、「どのよつなコーヒーにしましよつ」と聞かえされ少々まどつく始末。実は、ウィーンナーコーヒーには色々種類があり、ただ「ウィーンナーコーヒー」と注文しただけでは通じないのである。最もポピュラーなコーヒーは、アインシュペンナーと名のついたコーヒーで、特に、オペラ座裏にあるホテルザツビアのカフェテラスで飲んだアインシュペンナーは、最高にうまいものだった。しかし、少々値段が高く、一杯五十シリング（日本円約七百元）とは少々もったいないような気がする。また、夏期間中、市立公園にあるクーザロンと言うカフェでは、夕暮れより野外に設けられた舞台で、小編成のオーケストラがウィーンナーワルツを演奏し、曲の途中で、赤や黄色のドレスをまとった女性と、タキシードを着た男性の踊り子達数人が、軽やかにワルツ

を踊り、ウィーンの夕暮れの一時を楽しむことができる。空は夕日に赤くそまり乾燥した風が木々の緑の葉をゆらし、ウィーン特有のワルツの音を耳にした時、何の雑念も消え失せ、ただ自然の美と音の美しさにひきこまれる。

ウィーンの夜は、オペラや演奏会で始まる。Staat Oper (国立オペラ劇場)を始めVolks Oper (国民オペラ劇場)、Musikverein (音楽協会ホール)、Konzert Haus (コンサートホール)などの主要な音楽会場の外に、いたるところに小さな演奏会場がある。各プレイガイドには、一ヶ月間の演奏会の催しに関する案内が置かれ自由にとることができる。また、街路のいたるところに、高さ約五米程の円柱でできた演奏会案内掲示板があり、一般市民に音楽会の案内をしている。私は、仕事がない限りよく演奏会に出向いた。カール・ベーム指揮のウィーンフィルハモニー、ジュリーニ指揮のウィーンシンフォニカ、バーンシュタイン指揮のバイエルン交響楽団など大変印象に残っている。

特に、ウィーンフィルハーモニーのフルート奏者の珠をころがす如くの演奏は、今だに耳に残っている。ただ技術的な練磨だけによるものではない。奏者の音楽性と、各楽曲の深い研究の結果生まれてくる音楽であることを、思い知ったのである。少し大げさな言い方になるかも知れないが、美を通りこした、音楽の魂の表現以外何ものでもないようにさえ思えたのである。

オペラシーズンには、九月一日のこけら落としから始まり、翌年六月三十日まで十ヶ月間、休みなく連日催される。ウィーンでのオペラ劇場は、国立オペラ劇場と国民オペラ劇場が有名だが、夏期間中(七月―八月)はTheater an der Wien (ウィーン劇場)やSchön Brunner Schloss Theater (シェーンブルン宮劇場)で、喜歌劇「メリー・ウイドウ」・「こうもり」や「セヴィラの理髪師」などを鑑賞することができる。私が滞在中鑑賞したオペラは数知れないが、その内でも、今だに頭に焼きついているのは、

国立オペラ劇場で、ロッシーニ作曲「セヴィリヤの理髪師」のロジーナ役と、ドニゼッティ作曲「ルチア」の狂乱の場で歌ったソプラノ歌手のグルベローバ。歌劇「トスカ」で、カブラドツシュ役のテノール歌手ホセ・カレラスであった。天性の声とその技巧、音楽にたいする表現力は、ただただ頭が下る思いがした。そこには、グルベローバという假面をとりはずされたルチアであったし、カブラドツシュになりきったホセ・カレラスであったからである。ただ単純に、美だけの追求にとどまる音楽は、表面的なものだけに終る。その中に内在する音楽的な魂の追求が如何に大切であり、また如何に難しいものかということを、改めて感じ知ったのである。そのことが、聴衆に共感を与え、感動を得させるものの根源のように思うのである。

寒々とした冬の夜、ウィーンを中心街にあるケルントナー通りも、夜十一時過ぎれば、人通りも少なくなり、静寂ななかに眠りにつく。ステファン教会の横

に並ぶ、昔なつかしいガス燈の形そのままの街燈の光に、うつしだされる降る雪の光景を見ると、シューベルトの歌曲集「冬の旅」の中の一曲「Einsamkeit」孤独を知らずうちに思い出していた。何か一抹の寂しさを感じたその一時、芸術的都ウィーンの印象をより強く感じたのである。恐らくシューベルトは、「Gute Nacht」や「Einsamkeit」を作曲した折、このような光景を眺めながら作曲したに違いない。また、春ののどかな光の中に緑あざやかなベートーベンガング（ベートーベンがハイリゲンシュタットで作曲活動をしていた時の散歩道）を歩き、その小径にそって流れる小川を見つめ、木の間に間より鳴く小鳥達のさまを見る時、ベートーベンが、交響曲第六番「二楽章」「小川のほとりの情景」の作曲に際し、その自然の美の感動から、作り出された旋律であることが理解出来る。

春夏秋冬を通じうつり変わる自然のなかで、人々の気持の変化をも合わせて、今までに多くの音楽家により、芸術作品



ベートーベンの散歩道

が作り出されてきたのである。オーストリアの国民は、自分達の祖国で生んだ数多い芸術家にたいし、誇りに思っているし、いつの世代へもウィーンは芸術の都として、存続したいと願っているように私はうけとめている。

国立オペラ劇場、ブルグ劇場、アカデミー劇場、フォルクスオーバーなどの年間予算は、約一億ドルということである

この内、国庫補助は、七千八百万ドルと外務省や法務省の予算よりも多い。さすが音楽の都ウィーンである。

三、ウィーン国立音楽大学での研修

ウィーン国立音楽大学は、第三区ロートリンガー通りに本校が、メッテルニッヒ通りとヨハネス通りに分校がある。口

ートリンガー通りにある本校は、カール教会から市電で二、三分のところにあり私の下宿からは、約二十五分程であった。大学の各廊下の壁には、二十米間隔ぐらゐに、風景画や静物画が掲げてあつて、廊下のベンチで腰かけている学生達に、その芸術作品を觀賞できるやう配慮してある。大学の中には、大コンツェルトハウスザール（収容人員約二千名）・シューベルトザール（約四百名）・モーツアルトザール（約八百八十名）・三つのホールがあり、ウィーンシンフォニカ、バイエルン交響楽団、ルードウピツヒの独唱会など、毎夜のごとく演奏されている。

私は、本校二階（日本で言えば三階）の三百十号室Prof. Ernie Sittner（エミー・ジットナー教授）の研究室で、毎週ドイツリードの唱法を受けていたのである。ジットナー教授は、音楽にたいしては大変厳しい反面、平常は心の暖かいやさしい人であつた。秋も深まる十月、ヴァイマール通りにあるお宅へ訪問した際前学長であつた御主人のDr. Prof. Hans

Sittner（ハンス・ジットナー博士）と私三人で、夕食を御馳走になったことがあつた。一つのテーブルを囲み、エミー・ジットナー教授手作りの料理をいただいた折、「ウィーンでの一人住まいは大変だろう。ブドー酒を存分飲みなさい。」とあたかも我が子の如く暖かいもてなしを受け、何か熱いものを感じた。その夜、フォルクスオーパーでのオペレッタに招待していただき、私は、初めて耳にするDer Betel Student「乞食学生」というオペレッタを鑑賞させていただいた。

ジットナー教授は、オペラはモーツアルト、リードはシューベルトがお好きなので、また大変よく研究されている。

十二月初旬、シューベルトの歌曲集「冬の旅」を受講した際、日本では教わつたことのないきめ細かな指導を受け、私自身、曲の解釈の浅さにほとほと参つたしだいである。私は、ウィーン滞在中ジットナー教授の外に、Prof. Moore（モアー教授）・Prof. Lansky（ランスキー教授）・オペラ歌手Herr Fink（フィンク氏）の三



ジットナー教授

名に大変御世話になつたが、リードの唱法に関し各教授から学んだものを、詳細な説明を省き、簡条書に記すことにする。

一、リードの歌唱における発声法

一、ドイツ語母音の発声と日本語母音の発声の相違

一、発音についての注意

一、リードの詩の重要性とその正しい解釈

一、内在する音楽性の表現

ウィーン国立音楽大学でのドイツリードの研究は、私が研究課題としたHaydn Brahms Schubert Wolf Straussの作曲家が活動した土地でもあり、伝統的に残されたリードの真髓が、根づく残っている。その深さを理解するためには、短期間では、表面的な理解にとどまざるをえない。機会があれば、より以上の収穫を期待して、再度ウィーンで研修したく思っている。

帰国に際しランスキー教授は、私が音楽教育の研究のため、十月にハンガリーのブダペストで、コダーイシステムによる授業参観をしたことを知っていて、自分が大切にしていた、コダーイとともにハンガリーの音楽教育を推進したバルトークのレコードを、ランスキー教授より贈物としていただいた。この貴重なレコードは、私にとって、誠に嬉しい贈物の一つとなった。

四、ハンガリーの小学校・幼稚園の音楽教育を視察して

私は幸いにも、ウィーン国立音楽大学ソモーギ教授より、ハンガリーのコダーイ研究所ライ教授を紹介していただき、十月八日から十月十一日までブダペストに滞在し、幼児・初等のコダーイシステムによる音楽教育を、視察することできた。ハンガリーでの有名な作曲家でもあり、また音楽教育者でもあったコダーイは、マジヤール民謡の研究でも知られた人である。このコダーイは学校教育のなかに、革新的な方法でハンガリー民謡をとり入れ、ハンガリー国民に音楽的な再教育をして、ハンガリーにおける音楽を変革し成功したといわれている。一九三十年頃から、コダーイとバルトークによって始められたハンガリーの音楽教育即ちコダーイシステムは、ハンガリー民謡を中心とする音楽教材を編集し、音楽教育の基礎及び組織を作りあげ、現在の

ハンガリーの教育に大きく貢献しているといわれている。

十月八日、岐阜教育大学岩田先生御夫妻とともに、ウィーン西駅から、ブタペスト行午前十時十分発の列車に乗りこむ。十月としてはめずらしく暖かい日で、列車内では、背広を着ていて少し暑いぐらいの気温であった。空は雲一点ない小春日和。車窓からさす日の光がまぶしい。パスポート、ビザの検閲、換金などの手続きのため、ハンガリーとの国境で、約四十分列車は停車する。以前チェコスロバキアのブラチスラバへ旅行した際、約一時間列車を停車させ、列車の周囲に機関銃をもった兵士が、十数名見守るなか、軍用犬を連れた兵士が各客車の底を検査させ、車両では、眼光するどい兵士と検閲官が、パスポートとビザの入念な調べをしたことがあった。何か罪人あつかいさされているようで、あまりよい気持はしなかった。しかし、同じ共産圏でも、このハンガリー国境での検閲は、大変友好的であった。車窓より眺める田園風景、時



ブダペストのインクル小学校音楽授業風景

に目に入る森林の風景は、まことのどかな美しい風景だった。午後三時ブダペスト駅に到着。ライ教授からの紹介で、ブダペストの中心街より少々はなれた、閑

静な民宿に宿をとる。二日目ライ教授宅へ訪問する。ライ教授の話によれば、ブダペストは現在二十二区に分れており、各区にGrund Schule(小学校の正規の授業以外に午後専門的に教える学校)がある。ここで学ぶ児童が、十五万名もいるということだった。午前八時から午後一時または二時頃まで普通授業。普通授業終了後、プリパートでGrund Schuleで授業を受けるしくみになっている。このGrund Schuleには、音楽小学校と体育小学校があり、音楽小学校では、専門学校の形態で組織されており、この音楽小学校で学ぶ児童数が、比較的多いように説明されていた。

視察した幼稚園及び小学校は、ブダペストの中心街、二区と三区に位置する幼稚園一園と小学校二校であった。

コダーイは音楽教育に関し、「六才九才にかけての教育が最も重要である。できるだけ早く、保育園から教えるようにしなければならない。」と述べているが、私が訪問したMEDVE gasse Kinder garten

(メトフェガッセ幼稚園)での音楽の授業は、大変鮮やかな指導ですめられていた。わらべ歌と遊戯の中に、聴覚訓練とリズム感が教えられ、音楽を身体で感じさせながら、リズムとメロディーの基礎指導がなされていた。またFanyes gasse Volks Schule(ファンエスガッセ小学校)及びJikupel Volks Schule(イクペル小学校)の音楽小学校での授業では、主にソルフェージュの指導が中心で、その指導内容は移動ド唱法を用い、drmfistの文字符とリズム譜による楽譜で指導されていた。この文字符を用いる方式は、ジョン・スペンサー・カーウエン(John Spencer Curwen)の発案によるもので、過去イギリスの合唱の発展に、貢献したといわれている。またその指導には、ピアノなど補助的な楽器はほとんど使われず、カーウエンが発案したハンドサインで行われていた。コダーイは、音楽教育の指導内容において、合唱指導とソルフェージュの徹底した指導を重要視したが、子供達に理解しやすく、また導入しやすい方法

として、カーウエンの方式を用いたもの

と思われる。適切な指導のもとで、子供達の内在する音楽性をひきだす、理想的な音楽教育がされていた。一九三〇年よりコダーイ、バルトークが中心となり、長年の深い研究の結果、現在の充実した音楽教育があるのである。子供達が、明るくのびのびと音楽にとりくみ、音楽をする喜びを身をもって体験しているようすを、今もって、忘れることができない。

日本の教育を顧みた時、科学技術の発達により、教育面も知的教育の発展はめざましいものがある。勿論、今後も科学技術に関する教育は、充実されるべきことは当然であるとしても、豊かな心情を育てることが、今後の教育に課せられた大切な課題のように思うのである。昭和五十五年より日本の音楽教育は、新指導要領のもとにその内容も変わり、初等教育では、以前に比べ多くの日本の音楽が導入されている。その指導内容においてコダーイシステムが、大いに参考になる

ことだろう。

五、ウィーンの教会と宗教音楽

ルターの宗教改革以来、ドイツ人の信仰は、カトリックとプロテスタントに分れたが、ライン河沿岸と南ドイツがカトリック、北ドイツがプロテスタントであるといわれている。

ウィーンの教会は、ほとんどがカトリックに属しているが、その数多い教会の中で、「ウィーンの魂」として、ウィーン人の心のよりどころになっている教会は St Stephan dom (ザンクト・ステファン教会) である。ウィーンの繁華街ケルントナー通り入口から、約十分程歩いたところに、黒ずんだゴシック式の大伽藍が壮麗な中に堂々とした感じであつて、この大伽藍の右後方には、高さ百三十五米もある塔があり、マリアテレシア時代には、この塔が、ウィーンの中心であるとともに、ヨーロッパの中心として誇つていたようである。一九四五年、ソ連軍

がウィーンを占領していた時、ドイツ軍の砲撃にあい、教会内部の聖歌隊席や、古い彫刻類が焼失したようだが、祭壇や中世のステンドグラスが疎開してあつたので、その後、幸いにも昔の姿に復元できたということである。また、教会の後方二階の聖歌隊席には、ヨハン・エーベルハルト・ヴァルカーによって築かれた巨大なパイプオルガンが設置されている。私は、日曜ミサに度々この教会を訪れた美しく流れるパイプオルガンによる前奏からミサは開始され、牧師の説教をまじえながら、「Kyrie」「Gloria」「Credo」「Sanctus」「Agnus Dei」のミサ曲が、次々とオーケストラと合唱団の演奏によりすすめられる。美しく聖なる音楽に接した時、我を忘れ、その音楽を聞き入ったものである。そこには、宗教と音楽との深い結びつきを、みつけることができるのである。

ステファン大寺院を出て正面を行くとグラーベン通りに出る。この通りは、ベートーベンやシューベルト時代の盛り場

であったところで、現在も美しく飾った商店が並んでいる。この通りを突きあたり、左へ五分程歩くとホフ・ブルグの門に出る。このホフ・ブルグの一角にAugustin Kirche（アウグスティン教会）がある。入口は教会という雰囲気でないが、教会

の内部は、大理石作りの大変立派な教会である。この教会のミサ音楽は、世界最高の水準のものと私は思う。美しく調和がとれ洗練された合唱団と、ウィーンフィルのメンバーによるオーケストラを聞くと、これぞ宗教音楽の真髄であるこ



アウグスティン教会の日曜ミサ

とを認めざるをえない。

ヨーロッパでの一般市民と宗教との結びつきは、今だに強いという印象をうけた。各教会でのミサでは、老若とわず、多数の礼拝者の参加のもとに行われているし、また教育面においても、宗教的情操を培うための教育も行っている。ウィーンでかわした挨拶言葉、Gross Gott「神様に御挨拶を」。毎日曜日午前十時から十一時まで Österreich 1（日本のNHK第一放送にあたる）の放送から、各地の教会ミサを実況放送されていたことなど、日常生活のみじかなところに、宗教が浸透しているのである。

芸術の都ウィーン、音楽の都ウィーン私には終生忘れられぬ都になったようだが、一年間、誠に楽しい留学研修であったが、今ふりかえれば、大変短い一年であったようにも思える。親切なウィーンの人々、日本では得難い音楽的環境に恵まれた美しい都ウィーン、今後の発展を祈ってやまない。